



発行所  
 社団法人 国民文化研究会  
 (九州←→東京←→全国)  
 東京都渋谷区東1-13-1-402  
 振替 00170-1-60507  
 電話 03-5468-6230  
 F A X 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部  
 毎月一回10日発行  
 購読料 年間2000円

## 皇后さまの御親蚕

平成の御代に甦る天平の至宝

工藤 千代子

皇居の御堀のしだれ櫻が今まさに満開とならうとする四月初め、皇居三の丸尚蔵館で開催された皇后陛下古希記念特別展「皇后陛下のご養蚕と正倉院裂の復元」を拝観した。

この特別展の開催を前に上梓された皇后陛下の古希を記念する『皇后さまの御親蚕』(扶桑社)を拝読して、天皇さまの御稲作と共に、皇后さまの御親蚕がいかに深い思い召しによるものかを拝察申し上げて改めて強く感嘆させられた。日本書紀によれば、雄略天皇の御代、すでに養蚕の記述が見られるし、万葉集にも孝謙天皇の御代、養蚕豊作を願ふ大伴家持によって詠まれた歌が収められている。その後、宮中の御養蚕は幾度かの中断を経つつも、受け継がれて

明治以降は「皇后御親蚕」といふ形で現在に至っている。

皇居の森深く小高い丘に佇む紅葉山御養蚕所に皇后さまは毎年五月初旬から六月下旬にかけてお通ひになり、蚕を慈しむやうにしてお育てになられるといふ。養蚕の一ヶ月半は時を違はずに給桑しなければならず、気持ちの休まる間もない大変な労働の連続である。御養蚕所へのおでましは平成十五年には二十三回を数へたといはれる。二日に一度のおでましは平成十五年には二十三回を数へ

はられてをられる。特別展でひとときは目をひいたのは存亡の危機にあった蚕種「小石丸」の存在である。混血種と比較すると繭が

小さく愛らしい。また、光沢は小石丸の方が優れてゐる。小石丸は、明治三十八年、昭和天皇の御母君、貞明皇后さまがたいさつお気に召された日本産種ださつである。繭が小さく収繭量も少ない為、一般の養蚕家では既に飼はれてゐない。昭和六十年頃、宮中で飼育中止も検討されたとのことだが、皇后さまのご意向により大切に飼ひ続けられることになったのだといふ。

「日本の純粋種と聞いており、繭の形が愛らしく糸が繊細でとても美しい。もつしばらく古いものを残しておきたいので、小石丸を育ててみましょう」とお述べになったと、『皇后さまの御親蚕』には記されてゐる。

特別展では皇后様がまこころめて丹念に編まれた蓐族も展示されてゐた。皇后様の編まれた蓐族の中で小石丸は糸を吐き繭になる。

いく眠り過ごしし春蚕すでにして  
透る白さに糸吐き初めぬ

昭和四十八年 皇后様御歌

私は小学生の頃、群馬県にある母方の祖父の家で蚕の世話をした経験がある。私が採ってきた桑の葉を蚕はサワサワと小雨が降る時のやうな音を立てて食べる。その音を聞きながら眠り

についたことをなつかしく思ひ出す。皇后さまはその音がお好きださつで、蚕にお耳を近づけられ、聞き入ることがおありになると伺って嬉しかった。

皇后さまの御英断による「小石丸」の御養蚕が、やがて正倉院宝物装飾品(絹織物)の復元計画といふ文化遺産の継承の偉業に結びつくこととなった。復元プロジェクトチームが、古代の糸を忠実に復元するに最もふさはしい糸を徹底調査した結果、「小石丸」に辿り着いたのだつた。

皇后さまは「小石丸」を増産して繭を御下賜くださったといふ。また染料に使用する「日本茜」は現在ではなかなか手に入らない。しかし、皇居内には自生してゐるものがあるといふ。日本茜は天皇さまのご発案により皇居内で栽培されることとなった。何とももつたたいなくも、ありがたいことと思つた次第である。

千二百年余の年月を経た聖武天皇ご遺愛品の「天平の至宝」の数々が、両陛下の思い召しによって、このやうにして平成の御代に鮮やかによみがへつたのである。このたび復元され特別展で展示された宝物も、また千二百年後に日本の至宝として両陛下のご英断と共に伝えられていくことだらう。(主婦、数へ四十三歳)